

ブロードのデータセンターネットワーク事業 SANの技術でクラウド市場を開拓

データセンターにおいて大きなテーマとなっているネットワークの仮想化対応。ブロードは長年手がけたSANの技術を基に、このニーズに応える製品をいち早く投入。注目が集まる新市場で攻勢をかける。 文◎坪田弘樹(本誌)

クラウドを支える基盤技術として、サーバーやストレージだけでなく、ネットワークの分野でも仮想化が大きなテーマとなっている。

「仮想化データセンターのネットワークに求められる要件は、従来のネットワークとは大きく異なる。クラウドサービスを実展開するフェーズに移行するに伴って、仮想化対応ネットワークのニーズが急速に高まっている」

そう話すのは、ブロード コミュニケーションズ システムズ・代表取締役社長の青葉雅和氏だ。クラウド事業を推進する通信キャリアやサービスプロバイダーにとって、ネットワークの仮想化対応が現実的な課題として重みを増している。

サーバー／ストレージの仮想化はコストを削減し、管理を効率化するソリューションとしてすでに定着している。その一方で複雑化しているのがネットワークだ。これは、管理コストの高騰を引き起こすだけでなく、クラウドサービスの迅速な展開を阻害する要因ともなる。

この課題を解決するデータセンター(DC)ネットワーク向けソリューションに注力しているのがブロードだ。昨年、従来の階層型イーサネットとは異なるフラットなL2ネットワーク「イーサネット・ファブリック」(図表1)を発表。これを実現するコア技術「Virtual Cluster Switching (VCS)」を搭載したDC向けスイッチ

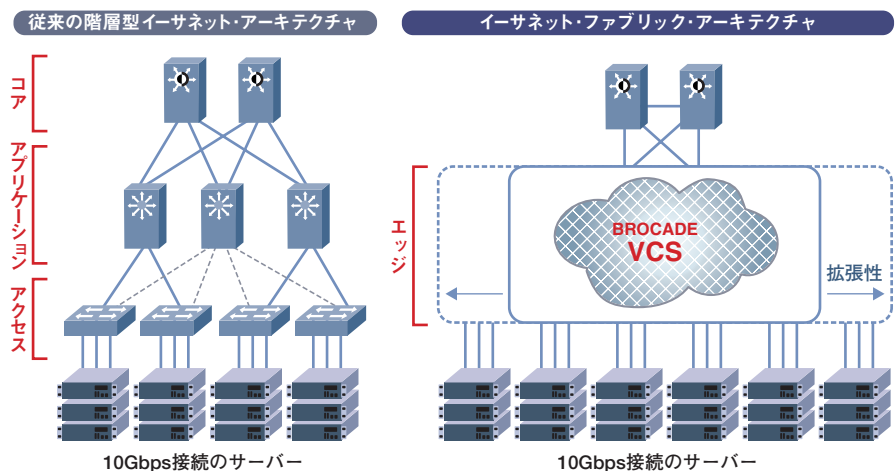
「Brocade VDX」の展開を開始した。

ネットワークのフラット化、シンプル化を実現する仮想化ソリューションは、ネットワークベンダー各社が競い合う、最もホットな市場だ。各社から新技術、新製品の発表が相次いでいるが、「実際に製品を投入できているベンダーはまだいない。当社は1月から『VDX 6720』の出荷を開始し、すでに実績も積み重ねている」と青葉氏はアドバンテージを強調する。

クラウドサービスを迅速に展開

イーサネット・ファブリックの特長としてはまず、スパニングツリープロトコルを排除し、マルチパスのレイヤ2ネットワークを構築できる点がある。また、複数のボックス型スイッチを論理的に1台として管理できる「論理シャーシ」、仮想マシン (VM) 移動時のネットワーク設定を自動化する「Automatic Migration of Port Profile (AMPP)」といった、仮想化ネットワークを実現する数々の要素を備えている。DCB (Data Center Bridging) やFCoE (Fibre Channel over Ethernet) に対応し、SAN (ス

図表1 イーサネット・ファブリック・アーキテクチャ



イーサネット・ファブリックを実現するデータセンター向けスイッチ「Brocade VDX 6700シリーズ」。ギガビットイーサネット対応のものから、FCoE、FC対応のものまで用途に応じて選択可能な5つのタイプがある